

ゆく春

平成30年6月号 目次
第91巻 第6号 通巻1064号

柿 若 葉 (俳句)	内山 眠龍	1
主宰コーナー	内山 眠龍	2
英語俳句 米有季定型俳句会との俳句作品交流 (1)	村上 博幸	5
草 笛 集	井村美智子 山田 瑛子 岩永紫好女 川又 曙光 村上 博幸 高橋 純子 新美 久子 大津 浩 植村 文彦 倉林 潮	6
柳家小満ん師匠の俳句		8
この一句 (5月号より)	金田 葉子選評	9
春 雷 集	和泉屋石海 福土あき子 山縣 文 佐藤恵美子 本間 辰也 岩澤 正春 金田 葉子 大和 尋人 荒木さんたろう ほか	10
ゆく春集	華 風女 松井 卯女 松井 もう 松浦 券月 丸山千登喜 森山 弘子 ほか	14
「道しるべ」コーナー	高橋 純子	19
句感 (4月号から)	山田 瑛子	20
樹林のある風景 円満寺のイチヨウ	斎藤新一郎	21
旭山俳話 古典に学ぶ (十八)		22
ゆく春の先輩たち (14) 岩澤正春句集「邯鄲の夢」から	和泉屋石海	24
鎌倉「安国論寺他寺巡り」吟行	渡辺伊世子	26
ホームページ便り 4月投稿より		28
各所句会報		29

編集後記／表3



柿若葉

内山 眠龍

葉桜の樹下や孤愁の人となる
生きるとは歩くことなり夏帽子
若葉して寺町通りの風の色
影を踏むたびに見上ぐる花水木
子よ孫よ出世は死語よ鯉幟
遠山は魁夷の景や村おぼろ
通ぶつて嗅ぎ分く仕草新茶古茶
エメラルドグリーンと囃す柿若葉



牡丹の芽

井村 美智子

春の雪重たく降りぬ車椅子
牡丹の芽風の尖りに戸惑へり
お任せの家事一般や蝌蚪の紐
山笑ふ墨絵ぼかしに色をのせ
菜の花や道草覚え下校の子

春爛漫

山田 瑛子

藤井君
盤上の棋士十五歳春爛漫
大谷君
シヨウタイム日米共に春爛漫
春筍や余生の延びる思ひして
忘れたる平仄詩語や永き日に
菜の花や幼の声の黄に染まる

竹の恵み

岩 永 紫好女

地元紙を纏ひ竹の子届きけり
筍や搗合ひしこと言はず受く
筍や脱ぎたる衣を皿にして
山売るの添へ文巻きて淡竹の子
テロップを付けて出るや蜃気楼

落椿

川 又 曙光

落椿気骨ゆるみて散りにけり
蝌蚪一つ日輪呑みて沈みけり
われはいついづこへ還る鳥雲に
電線は空の五線譜さへづれり
白木蓮の空を押し上げ咲きにけり

花水木

村上博幸

溪谷の花明りより列車かな
笑む人を見る人の笑み花水木
山門を青々と染め実梅市
毒だみは象のハナコの好物と
作り手の思ひ戴く夏蜜柑

水俣産無農薬品を賜り

草引く

高橋純子

草引くや胸におさめる愚痴ひとつ
糸取るに繭を煮るとは児に言へず
のどけしや大船観音過ぎて富士
竿先の視線動かず夜釣りの灯
妬ましくも未来ある児等苜蒲の日

春風

新美久子

閉店のビラひらひらと春の風
春風に乗りて行きたや父母の国
恋猫の魔風となりて天翔ける
満開の桜に秘めし愁ひあり
塗り替へし園のベンチにある余寒

植田

大津 浩

五十路より役に円熟葱の花
昼弁のベンチ空なしチューリップ
ローカル線落花蹴散らし蹴散らして
発車待つ窓へ花風花吹雪
麓まで雨奇晴好の植田かな

遍路

植村文彦

春休み羽のひろがるくじやく小屋
春光や先頭を待つ給水所
レジかごへゃんはり曲げて春の落
句を拾ひ荷を捨てゆくや徒遍路
灯明を奥より点す遍路かな

筍

倉林

潮

夕映えていよいよ白き桜かな
風凪て天指す幟春大祭
寄り添ひて話すことなし濃山吹
林立のビルの谷間や花木
歓声の湧きて筍傾かぶきをり

柳家小満ん師匠の俳句

雁風呂や

五右衛門釜の

心地よさ

小満ん



写真で一句

枇杷の実や昔家族の多かりき

関谷正道



◆この一句（五月号より）

チューリップ両手にかかへ並ぶレジ

石井和子

一読して、気分がうきうきしてきました。両手ではなく、両手にですから、かなり沢山のチューリップを、たぶんお店にありったけ抱えてレジの列に並ぶ作者。周囲の視線に照れながら、何か楽しい心積もりがおありのようですね。一輪ずつ包んでピアノ発表会で配るとか、新装開店のレストランに飾るとか、どさりと活けて絵を描くとか……

作為のない詠みぶりと、チューリップの無邪気なイメージが上手くかみ合っていて、五月号の中で、いちばん想像力をかきたてられた一句です。

金田葉子 選評

六月号担当 石井和子

ゆく春札幌句会のご案内

日時 六月二十三日（土） 午後一時～四時

受付開始 午後十二時三十分

場所 道民活動センター（かである2・7）

八階「810B」会議室

地図・アクセス 十八ページ 参照

内容 講演 内山主宰

句会 兼題 「アカシヤの花」二句

「当季雑詠」 二句

*当日 短冊（準備いたします）に御記入の上受付に提出して下さい。

会費 二、〇〇〇円

問合せ先・申込先

諸中 一光

札幌市西区琴似四条五―三―一

電話 〇一一―六一五―九七七〇

※句会終了後懇親会を左記の要領で開催したいと思います。いますのでご希望の方は事前にご連絡下さい。

場所 北京食苑「京花樓」大丸札幌店8F

時間 午後五時～七時

費用 三、〇〇〇円



春雷集

海老名 和泉屋 石海

亀鳴くや百寿百寿と言ひをれば
最後やも知れぬ桜を惜しみけり
豌豆やそろばん塾はなほ盛ん
春二番三番四番今日は地震
散る花やうなじくすぐる天女の手

旭川 福士 あき子

八十路なる姉も団員夏は来ぬ
走法の三者三様 風五月
すれちがふ人に鈴の音初夏の丘
檻樓にあらずジーンズ夏の風孕む
風わたり水とどまりぬ水芭蕉

東京 山縣 文

喪の家の門に灯るや白椿
山彦の一音高き春の山
囀や走り出す子と転ぶ子と
百千鳥湖に散らばる金平糖
改札を出て春塵の街の人

東京 佐藤 恵美子

ギヤマンに盛る海の幸山の幸
少年の放つ草矢を胸に受く
草原の遊手に追はれ夏の蝶
受け売りの話卯の花腐しかな
幕引きは先のことよ新茶汲む

横浜 本間 辰也

三月がゆく三月をのり越えて
かたくりのしなやかな風うまれけり
うららかや網を繕ふ船溜り
打ち返す波を眺めて日永かな
春暁を来し新聞の文字匂ふ

横浜 岩澤 正春

古稀祝ひこれとてなくて目刺焼く
春宵やチャイナタウンの豊かな灯
禍を福に転ずる苗木植ゑにけり
記憶をも臚にさせる湖畔の灯
春愁や古稀なほ知らぬことあまた

前橋 金田 葉子

白木蓮いま鳥の群れ飛びたたん

新人は正座くづさず花筵
ねぎらひのメール一行花疲れ
げた箱の名札貼り替へ三月尽
はるけしや母にふらここ押されし日

厚木 大和 尋人

分校の土筆混みあう通学路
口籠る初音でありぬ鎌倉路
選抜という球春の力瘤
雪解水奥入瀬の深謳うかに
靖国の桜や永遠に眠れるか

東京 荒木きんたろう

蜃気楼破壊しながら貨物船
パステルの色よ香りよ春逝けり
駅弁の蓋に貼りつく淡竹の子
リュックには筍二本隠れをり
竹の子の背負子にぎうと押し込まる

東京 石原 まさ子

利休忌や楼門の綺羅翳りなく
法灯の山路の雨や花木五倍子
春うらら勢至菩薩の足の裏

夜の花見宇宙遊泳かくのごと
人気なき競り場の闇や春の昼

札幌 諸中一光

球春や腕ぶち一本の飛雄馬たち
カラオケのドアの顫ふるや春謳歌
刈る牧夫刈られる羊夕あかね
嘶いて若駒いさむ牧の朝
北限の櫺の若葉や峰はしる

東京 石井 真田美

右手からピアノ教室四月かな
藍色の漕ぎ手が法被花の塵
あをぞらに色の錆びをり花辛夷
七段や卒寿が雛の十畳間
今生の父も猫背や昭和の日

秋田 石井 和子

陽春や自転車の子等疾走す
路の臺つみ指先の香にひたる
群れ咲きて一輪草のけがれなき
カーテンの半分あきし君子蘭
スカーフ解く花片ひとつこぼれけり

横須賀 渡辺伊世子

無駄口を利かぬ板長亀の鳴く
陣取りに負けて立見の桜人
水尾の鉤交はす番ひの春の鴨
初燕三崎詰め所の番外地
永き日や猫の反り身の深眠り

西東京 屋代節子

学校の桜百年子等守る
入学日桜と写真卒業も
花万朶師作詞校歌甲子園
花菜漬塩ならではの色のさえ
鮎やなつかしくぎ煮瀬戸の海

士別 高橋秋円

流水の寄りつく港船閉ざす
待たされて子等達たわむ春の土
着る物の中途半端や春なかば
厩出しの催促重ね前がきす
孕み馬間近に産みの初体験

東京 鈴木はな子

春惜しむ苦海浄土に栞しつ
フクシマに騙し絵のごと海市立つ
蜃気楼崩れゆくあの建屋かと
寿司種の春筍の白さかな
筍の身ぐるみ剥げば香を放つ

旭川 谷島展子

芽を競ふ諸木たのしや春の雨
噴煙の混じる霞や島咽ぶ
ひたひたと膨らむ羽音鳥帰る
蝌蚪の水白雲これに宿りけり
満ち潮にゆるる解や朧月

横浜 船橋貞夫

春夕べ染まる茜や潮溜り
春宵や微熱の街に繰り出せり
潮の香にまぐはふ夜の沈丁花
桜散るさらば一献また一献
耕人や背筋伸ばして桃の花

ホノルル ミッコフュウシモンズ

葉桜に十月とつき先なる色想う

ポテサラで庭の胡瓜を自慢出来

父の日や遺影に酒と熟れマンゴ

ハワイ産年中辛い夏大根

ロコガール浴衣にティアラとハイヒール

横浜 坂 美智子

旧街道宿場の町の桜餅

菜の花や白きフェンスの風の色

初蝶や追ひつ追はれつ切り通し

咲き始むる柵の一輪黄水仙

留守居して雨を伺ふ花の冷え

調布 井上 武

母歌う声に鷺草揺れており

黴臭く角取れている文庫本

街道の先いっぱいの皐月富士

耳病みて部屋に音無く梅雨曇り

「ただいま」の羽音飛び込む夏燕

東京 大神 柚津

一駅をそぞろ歩いて春惜しむ

古時計音ゆるやかに逝く春や

春筍の和毛へ朝の雨ひそか

キヤラバンの目にカンフルを蟹気楼

蟹気楼崩れしあとの海広し

旭川 渡 タミ子

ものの芽の主張始まる雑木山

箸先に小さく味わう露の味噌

下萌や銘水の湧く音近し

朝練に急ぐジャージよ川霞

軽やかな音を集めて春の水

妙高 柳澤 醇也

たんぼのお辞儀しながら汽車送る

群れ外れたんぼ一人ぼつちかな

たんぼの冠曲がる少年よ

大人への階段試す蛙の子

一児から千児と続く蛙の子

